

『就実論叢』第五一号 抜刷  
就実大学・就実短期大学 二〇二二年二月二八日 発行

短歌「添削」指導考 (二)

—— 『名家添削 短歌作法』(昭和一二年)に  
おける与謝野晶子の「添削」——

加藤美奈子

## 短歌「添削」指導考（二）

——『名家添削 短歌作法』（昭和十一年）における与謝野晶子の「添削」——

はじめに—与謝野晶子の「歌の添削」

前稿「短歌「添削」指導考（一）」「添削」指導の現在、与謝野晶子「歌の添削」（昭和六年五月）他」（『就実論叢』第四九号二〇二〇年二月 一〇一〇頁）において、従来、短歌の「研究」と「創作」とは分かちがたく、相補的な関係であったが、「狭義の短歌研究」においては、散文同様、「創作」とは切り離すべきとする提言のあることに言及した。また、短歌結社における「慣例」が、「狭義の短歌研究」を困難にしている現状を結社内での「添削」のあり方を例に概観した。

近代においても、与謝野寛（鉄幹）は、「新詩社清規」（『明星』明治三三年九月）において、「社友の交情ありて師弟の関係なし」

と提唱し、「添削」ではなく、「可否の意見を附記して、作者の参考に供ふ。之を用ゐると否とは社友の任意なり」という方針を示した。「自我独創の詩を樂む」（『新詩社清規』）新詩社の方針にあわせ、「任意」としたのである。

後年、与謝野晶子は「歌の添削」（『冬柏』昭和六年五月）において、「或は辛辣だとか原作を破壊し過ぎるとか云ふ人があるかも知れない」と「添削」を施すことへの危惧を述べ、「併し一首と雖も粗漏に加筆したものは無く、すべて原作者を愛し詩を愛する真面目さから、私達の命を削りつつ敢てした事である」と総括している。

本稿では、特に与謝野晶子の「添削」が如何なるものであったか、晶子自身の作歌の方針とあわせ、実例とともに詳らかにする。

一 与謝野晶子「初歩の人への添削」——『短歌作法講座 第二巻 名家添削 短歌作法』（改造社、昭和十一年）

歌誌『歌壇』における「巨匠の添削」と題されたシリーズ企画において、与謝野晶子を取り上げた、「現代歌人協会公開講座 ザ・巨匠の添削。→添削から探る歌人の技と短歌観」第五回『与謝野晶子』松平盟子 司会・笹公人（『歌壇』第三二巻一二号 本阿弥書店 平成三〇年十二月 八二〜九六頁）では、『短歌作法講座 第二巻 名家添削 短歌作法』（改造社、昭和十一年）所収の「与謝野晶子篇 初歩の人への添削」から、八首が紹介されている（後掲歌番号01〜08）。

『短歌作法講座』については、晶子の「年譜」（『定本 與謝野晶子全集』第八巻 歌集八（講談社、昭和五六年）四二九頁）には、以下のようにある。

昭和十一年（一九三六） 五十八歳（略）

五月、（略）「歌に志す婦人に」を『作歌入門』（改造社刊）に共著として収録。

「歌に志す婦人に」は、前稿でも引用したが、『短歌作法講座 第一巻 作歌入門』（改造社、昭和十一年）所収（三六七〜三八八頁）である。『短歌作法講座 第二巻』所収の「与謝野晶子篇 初歩の人への添削」は、年譜にも記載がなく、『全集』未所収の

ため、昭和十一年刊行の同書に拠らなければ参照し難い本文である。晶子の「添削」の実例として見逃せない資料であることから、以下に引用する。

「与謝野晶子篇 初歩の人への添削」『短歌作法講座 第二巻 名家添削 短歌作法』（改造社、昭和十一年）二二九〜二四一頁。

引用にあたり、旧字体は新字体に改めたが、固有名詞・表題等には旧字体・異体字を残した箇所がある。添削後の短歌に歌番号01〜22を付し、「原作」の添削箇所は傍線を施して示し、いずれも太字にした。傍点<sup>・</sup>は原典により、総ルビは省略し、適宜残した。晶子の添削の方針が端的に表れている部分に波線を施し、後に分析を加えた。

与謝野晶子篇 初歩の人への添削

此处に集つてゐるのはまだ作歌の道に初心な、云はば練習中の人達の歌である。この程度の歌を作つて居られる人達には参考になるかも知れぬと思ひ片端から披露する。練習中には感じて云はうとする事があつても言葉が出来ず、言葉の組合せなどにはまして無頓着で非音楽的な、また不明瞭な歌になつてしまふのを、自分達の苦勞して来た経験から、かうすれば好いであらうとして見せるのが添削である。練習をする時とは違つて、堂々と出版する歌集の歌などは他人が添削を加へてよいものでないことは云ふま

でもない。習作には教へられねばならぬ点が多いのである。

01 笛の音に涙こぼるる若さをも猶備ふると嬉しかりけれ

原作は「銀笛に涙こぼるる若さをも持つと覚えて嬉しかりけれ」かうであつた。銀笛であらうとも笛の音とだけ云つて置いていいのである。銀の字はこの場合に全体を厭味なものにする恐れがある。持つと覚えてだけでは、以前は持つてゐたがと云ひたい筈の作者の心がよく出ない。

02 子供等に和して我身も歌ひたり野のはてなるは秩父山脈

「子供等に和して我身も歌ひたり秩父山脈見はるかす野に」と云ふのが原作であつた。是れは四五の句だけを変へた。子供等にと初句にあつて、終りにもであるのが厭であつたのである。見渡せばなどと云ふ言葉は必要のない限りは省略して効果の多い句を置かねばならない。自分が見てゐると云ふよりも、見てゐるものはこれであると云ふ方が効果的なのである。

03 かりそめの病なりけり安かれと医の告げし日は若かりしわれ

原作は「かりそめの病ひなれば安かれと聞きにし時は若かりにけり」である。わづらひは煩ひと耳に聞える。病氣であることを確かに読者へ通じない。其の何んでもない安心するがよいと云はれたと云ふことも、医師が云つたのでないと初めに信を置いたの

が誤りになる。そんな長い病氣の初めには必ず医師の診断があつたものであらうとして私はかう直して見たのであつた。

04 若き日の夢と思ひて忘るべき人故われの身の瘦せて行く

「若き日の夢と思ひて忘るべき人に苦しむ心いとほし」これが原作である。自分の苦しんでゐるのが哀れであるなどとは云はずに、さまざまに苦しんでゐる自己の状態を現はすべきであると私はした。

05 雨のち嵐のさまとなりたるに驚く若葉騒げる青葉

もとののは「春雨の嵐となりておどろおどろ玻璃越しに見て驚く若葉」これであつた。三句四句が極めて粗雑に出来て居た。けれども私は雨が嵐になつたことに若葉が驚くと云ふことに少しの面白さがあると思つて筆を加へて見たのである。作者は自分がおどおどと覗いてゐるつもりであつたかも知れぬのであるが、文法通りに解すれば私の云ふ通りである。原作では若葉が硝子の中から見てゐるやうでもあつて位置が解らない。是れもまた見てゐる自身のこととは云はぬ方がいいのであつて、青葉若葉の驚いて動くことを強調することに私はして見た。

06 和みたる夕餉の集ひこの中に見がたき母を悲しむ今日も

「なごやかな夕餉の集ひその中に母を見なきを今日も悲しむ」

が原作。初句は口語を誤つて使つたものである。その中はこの中でなければならぬ。見なきも言葉にならぬ。然し私は作者の心もちだけを尊重してこんな風に直して見たのである。

07 なごやかに風吹く園を歩きつつも人間の子は物思ひする

原作は「なごやかな風吹く園を唯一人物思ひつつ歩みあるかも」であつた。物思ひをしながら行く時に伴れが何人もあつたとは思はれない。唯一人と云ふ言葉はこの場合に無駄である。歩みあるかもの七字をもつと中実のある言葉に私は変へたかつた。春の自然界の現象の長閑かなのに対して人間と云ふ言葉を加へたらいいと思つたのであつた。

08 野辺に出で今は涙も忘れたり大天地の和の中行かん

「野辺に出で愁ひも涙も忘れたり大らけき春の和の中を行かん」とはこんな歌であつた。和の中を行かうと云ふ句だけが私に面白く思はれて直して見ようと思つたのである。愁ひも涙もと二つ云ふ必要は此処でない。大らけきと云ふ言葉も悪い。

09 神主に二人が和せしかしは手の音を忘れず幸ひにぬ

原作は「幸あれと二人が和せし拍手の胸に沁みしを今も忘れず」と云ふのであつた。是れだけでは現在の夫婦は幸福であるのかどうか解らない。胸に沁んだと云ふよりも忘れないと短く云つて

却つて強く響く場合もあるのである。そして終りに私は幸福である」と云はせてしまつた。

10 あぢきなし鏡に座して失なへる若さを今は求めんとする

原作「春の日の鏡に座して失なへる若さ求めつ心倦しも」。私は拙い末句の意をつめて短く初句に置いて見た。今即ち現在と云ふ言葉を入れることで哀感が出せたと思つてゐる。

11 同じ事日に重ねて過ぐせるは平凡なれどいと平和なり

これは「同じ事日ごと日ごと過すわれ平凡なれど平和なるかな」かうだつたのであつて、同じ事を過ぐすと云ふのでは言葉をなさない。また平和なるかなは大さうである。此処は軽く云つて置く方がいいのである。

12 若き日のあこがれも無く心をばたつきの道にささぐる我等

「あこがれの若き日もなく此の身をは貧しき生活にささげたりけり」と云ふのが原作である。女の歌は殊に誤解され易い言葉を避けねばならないために、この身を心と改めた。また散文通りに字余りを構はず使ふのは宜しくない。終りを複数にした方が強く響くであらうと思つたのである。

13 天地のよろこびを皆占むること若葉の道に歌ふものかな

原作の「天地のよろこびを一人占むること若葉の道に高らかに歌ふ」では、よろこび一人占むると云ふ言葉が詰まつて非音楽的である。高く歌ふと云はずとも、そんな所で歌ふのであるから高い声も出ること**は是れだけでも解ると思ふ**。

14 大空の雲は動かずわれ坐して見るは若葉の影を置く水

「大空の雲は動かずわれ坐して見るは若葉の水にうつれるを見る」の原作を、是れは後の句だけ直した。歌の調子がよくなつた筈である。

15 いつまでも若く立てよと野の草に云ひて別れぬその明日のため  
原作は「いつまでも若くあれとて草々に云ひつつ我れは野辺を立ち出づ」これである。草々は種々としてより耳には聞えない。拙い言葉である。野から路へ出で家へでも帰つたか。山へでも入つたのであらうが、野を立ち出づは大仰な言ひ方である。そしてここでは散文的になる。無理な注文を草に言つて聞かせるのであるから、自己の希望を云つただけであると明らかにして置く方がいいと思ひ、その方法を取つた。

16 若人の群に遠しと自らを棄つるが如く云ひなす君よ

原作は「若人の群には遠しと自らを棄てゆく君よ悲しからずや」とあつた。二句を群にはと字余りしなければならぬ程の必要を私

は認めない。また悲しからずや、などと云つてしまつては面白味はなくなるのである。まだ彼れはさう云つただけで自棄的行為をしたわけではないのである。

17 若くして気まぐれ心誰れももち彼のみ便りは書き給ひけん

「若くして気まぐれ心誰れももち彼のみ便りは書き給ひけん」は原作であつて、このもちたればがあやふやな言葉である。誰れもと云ひ、同情のある心を云つた。

18 うきことを忘れて強く生きんとす若芽の如し生れ變りて

原作は「思ひをば忘れて」となつてゐた。強く生きようなどと云ふ歌では殊更はつきりとした言葉を使はねばならないのに、此処で思ひと云ふ言葉で煩悶を現はさうとするのは宜しくない。

19 触れたらば跳ね返すかと思はれるよろづの若葉生氣あふれて

原作は「若草の葉に生氣あふれて」とあつた。若草にさうした力があるとは思はれない。若しさう感じさせる程の若草があつたのなら、然か思ひ至るまでの趣きを云はねばならない。此頃の歌でもあるから若草ではないのであらうと見て、木草を混せて若葉とだけ私は云はせるやうにした。

20 身をかはし若葉の中を飛ぶ鳩のありて夕に及ぶ山寺

この原作は「身をかはし若葉の中を飛ぶ鳩の声に暮れ行くこの山寺」と云ふのであつた。声に暮れ行くなどと云ふことは余りに古臭い言葉を並べてあるだけとしか人は受け取らない。其れよりは目に見ただけのことを云つて置く方がいいと私はするのである。

### 21形やよとのひ初めてわが藤の若紫になびく朝かな

「かたちやよとのひ初めし柵の藤若葉紫にほひこぼる」と云ふ原作であつた。若紫と云ふ言葉が色の艶やかさも既に現はしてゐるのであるから、その藤の動いてゐること、そして朝であることを私は添へて見たのであつた。

### 22打けぶる若葉もなくて蒼海に雨くだる日はわびしかるらん

「雨けぶる」と原作にはなつてゐた。しぶくは蒼海などと云ふ大きな言葉に続けて云ふに適つたものでない。煙ると大して違はないものである。

## 二 与謝野晶子「短歌の作り方」―「選者の言葉」(『讀賣新聞』昭和七―一三年)

以上に引用した「初歩の人への添削」を分析するに先立ち、与

謝野晶子の作歌の方針について、端的に示した資料について確認する。

以下は、昭和七―一三年に『讀賣新聞』において晶子が選者をした「婦人短歌 与謝野晶子選」において、「選者の言葉」として掲載された内容で、与謝野晶子倶楽部編『与謝野晶子 選者の歌(付『婦人短歌 与謝野晶子選』)』(与謝野晶子倶楽部、二〇一二年)より引用する。

同書には、『讀賣新聞』(昭和七―13年)に掲載された「選者の歌」(657首)、及び「婦人短歌 与謝野晶子選」の歌(2488首)の内、「等級と評」のある歌(207首)を「選者の評」として収録している。前者は与謝野晶子自身の歌、後者は選者である晶子が課題を出し、全国の応募の中から、更に課題ごとに一・二・三等を選び、評を記したものである。(略)晶子の短歌論・時事評論、関連記事も採録した。収録歌の時期は、晶子54歳―60歳。(略)選者として晶子は「明晰・優雅・清新の三つを備えた、言葉の芸術・言葉の音楽」(「選者の言葉」昭和7・5・8)を旨とするという作歌理念を高らかに謳い、惜しみなく自らの歌を世に問うた」と概説されている。以下、同書より、晶子の作歌の方針が端的に表れている部分を引用し、特に重要な箇所には波線を施した。総ルビは略し適宜残した。

「選者の言葉(1) 昭和7年(1932年)5月8日」(二―三頁)

読売紙上の募集短歌を御委嘱に由つて当分の間、私が拝見することになりました。

私は歌壇の流派と交渉のない人間であり、従つて流派に対する偏見を持つていません。併し次の事だけは申上げて置きたいと思ひます。

歌は言葉の芸術であり、同時に言葉の音楽です。それで芸術の領域に入つた作、云ひ換ると芸術としての何等かの新しい発見のある作でない採録致しません。

また言葉の音楽であるためには、明晰と優雅と清新とを備へた言葉を用ひて、皆さんの発見に由る芸術的実感を三十一音の短歌に新しく作曲して頂きたいと思ひます。それですから、古臭い感情の繰返しと、実感の生き生きした表現を妨げる万葉擬態の古臭い言葉つかひの作は採録しません。

また私は三十一音の古典的歌体である短歌と口語の語感とは一致しないものと信じてゐますから、必ず明晰、優雅、清新の三つを備へた文語のみを用ひて、新しい「言葉の音楽」を工夫して頂きたいと思ひます。

要するに私は皆さんから感情の言葉と共に皆さん御自身の創意に成る新作を拝見させて頂きたいので御座います。歌壇の流行などは眼中に置かないで、ほんたうに発明権が皆さんにある歌のみを作らうと御努力下さいまし。勿論選者である私などの歌を模倣なすつてはいけません。私は自分の気の付かないやうな新しい詩

的感情と、新しい言葉づかひとで出来た歌のみを喜んで採録致します。

猶また、折角の新しい題材（感情）が、言葉の不備のために十分な表現を得てゐないやうなお歌に対し、私が少し筆を加へることのあるのを、あらかじめ御諒恕下さるやうに願つて置きます。

「選者の言葉（2） 昭和7年（1932年）10月27日」（四頁）

#### 与謝野晶子

一、一枚の葉書に必ず三首以内の歌を書くことの規定をお守り下さい。

二、嘗て私がこの募集の初めに述べましたやうに、常識的な感情を詩的な感情と誤解して、三一字に入れやうとなさらないやうに願ひます。それは無駄な努力です。必ず詩になる感情を発見して、それを歌にして下さい。

三、実感に遠い万葉風な古語の歌は選者に於て採りません。

「選者の言葉（3） 昭和8年（1933年）1月16日」（五―六頁）

#### 与謝野晶子／第一義の歌へ

（略）お互の歌は勿論めいめいの楽しみとして詠むのですけれど、やはり歌を詠む以上は、世界の詩と同じ水準に立ち、それ以上に出るやうな新しい芸術品にまで鍛へ上げたものです。それには只今の歌壇に流行する平俗主義や擬古主義の眼中に置かない

で、昭和新人のほんたうの新作を出さうとして、めいめいのお心で鑑賞し、めいめいの音楽的な言葉でお作りを願ひます。

それから博く深く読書をしない事は歌人俳人の通弊ですが、殊に婦人は読書力が足りないので、人生や自然に対する感じ方も進歩せず、言葉の蓄へも貧弱になりがちです。お互に此の通弊に陥らないやうに心掛けて、文学書と限らず、いろいろの高級な読書を行きたいと思ひます。（略）

俗情は誰にもありますが、詩の題材となるものは俗情を排斥し、忌避する心から生れます。互に俗情ばかりで生れて居らず、それ以上の感激が時々体験されます。それが詩になる感情です。俗情は記録する必要のないものですが、詩的感情は芸術品として各自の精神的記録と致したいものです。要するに詩的感情を豊かに持ち得ると云ふことは人格の向上そのものであつて、尊いことであると思ひます。

文学はすべての言葉で芸術ですけれど、中にも歌は少しの言葉で深い感情を現すのが目的ですから、歌の作者は言葉の味ひと其用ひ方とに、特に潔癖であり敏感でなければなりません。また言葉も多く知つて居て、その言葉を最も有効に用ひる心掛が大切です。折角詩的感情を持ちながら、常に言葉で失敗致します。かやうな点に十二分にお考へ下さるやうに願ひます。「感情も新しく、併せて言葉も新しい」と云ふことが歌の第一義です。此事は創作の苦労を重ねてお行きになると段々と、お解りになる事と思ひま

す。

選者の言葉（4） 昭和10年（1935年）1月19日（八〜九頁）

短歌の作り方（上）／与謝野晶子

歌は小説や戯曲と行き方が違ふ。その違ふ点を大きく分けて云ふと四つある。

（一）作者の発見した新しい個人的感情が歌の題材の全部である。この個人的感情が常識的感情で無くて芸術的感情であるのは云ふまでも無い。

（二）作者の個人的感情を發言することが歌の目的の半である。

（三）歌の發言は談話でも無ければ散文で無い別の言葉に由る。その言葉は文章語から選んで用ひる。

（四）歌は言葉の音楽である。音楽化された言葉である。一首一首に個人的感情を題材として言葉の音楽を作曲することが歌の目的の全部である。ヴェルレエ又は「詩はすべて音楽なり」と云つた。

私は右に述べた所を批判の標準として、常に自分の歌を作り、また作つた自分の歌を嚴格に取捨してゐる。

私は今の歌壇と交渉することを欲しない。歌壇は私の理想とする歌の行き方と殆ど全く背馳してゐる。歌壇の歌は私より見れば散文化と常識化の甚だしきに堪へない。また実績の美を挙げない

で、無用の論が先に立ち、強弁を用いて他に勝たうとする俗器に堪へない。私の見る所と体験する所から云へば歌は楽しむものである。論ずるものでも無ければ名を求むるためのものでも無く、他に勝たうとして争ふべきものでもない。(つゞく)

選者の言葉(5) 昭和10年(1935年) 1月21日(一〇) 一一頁)

#### 短歌の作り方(下)／与謝野晶子

私は自ら求めて他の作者の歌を批評しようとする者で無い。さう云ふ自薦行為を今日まで一度も経験しない。私は此点に極度に謙虚である。

併し選者たることを求められて辞することが出来ないで、その任を引き受けることはしばしばある。「讀賣」歌壇の如きがその一例である。

さう云ふ場合に、私は自分の歌の模倣を極端に嫌つて、それを採らうとしない。私は飽迄も前に述べた標準に由つて、作者の新しい個人的感情が作者の発見した新しい言葉の音楽として完成してゐるものをのみ採るのである。

さて此一年間の「讀賣」の歌に就いて概評を述べると、二三の作者の歌には、低級ながらも右の標準に合した個人的特色が次第に現れて来たのを、その作者達のために喜んでゐる。併し概して他の作者達は、題材に個人的感情の発見が乏しく、歌の題材とな

らない常識感情が多い。また言葉の音楽を作らうとする意識が眠つて居て、洗練されない粗硬な、また擬古的な、また鄙俗な言葉が濫発される。私は此事を遺憾に思つてゐる。

歌壇の傾向などを低く見下して、自己の歌を創造しようとする努力、それとともに国語の語感に対する繊細な敏感、また選択したよい国語を用ひ、一首ごとに新しく音楽化することの工夫、是等の事を作者達に望まずにゐられない。

題材にも個人的発見、言葉つかひにも個人的発見、この意味でほんたうの歌を見せて頂きたい。題材に新しい要素が加はり表現に新しい方向が示された歌を、私はどの作者にも期待する。

#### 三 与謝野晶子「短歌の作り方」と「初歩の人への添削」——「作り方」から逸脱する「添削」

以上の「選者の言葉」により、晶子が新聞読者、歌壇への投稿者に向け、選歌の方針とともに「短歌の作り方」を繰り返し示そうとしたことがうかがわれる。「表現」と「内容・主題」の両面から要点をまとめると、以下のようになるだろう。

表現 「言葉」について——「言葉の音楽」であること

「明晰と優雅と清新とを備へた言葉」／「新しい言葉」／「文語」

「文章語」のみを用いる／「よい国語」「作者の発見した新しい言葉の音楽」

「散文化」「洗練されない粗硬な、擬古的な、また鄙俗な言葉」の否定

「万葉擬態の古臭い言葉づかひ」「実感に遠い万葉風な古語」の否定

「言葉」の面においては、「清新」で「新しい言葉」と、「文語」であることが矛盾せず、「言葉の音楽」であることが繰り返されている。また、「文語」「文章語」と「万葉風な古語」が峻別されていることに留意される。

内容・主題 歌にすべき「感情」について―「芸術的感情」であること

「新しい詩的感情」「人格の向上」／「個人的な発見」「何等かの新しい発見」のあること。

「常識的な感情」「常識化」「自分(晶子自身)の歌の模倣」の否定／「俗情」を排斥し、忌避する心／「歌壇の流行などは眼中に置かない」姿勢

これらの要点と先に引用した「与謝野晶子篇 初歩の人への添削」の内容を比較すると、晶子の「添削」においても、同様の方

針であったことが明らかになる。

表現、「言葉」の面での作歌の方針は、添削における05「極めて粗雑」、06「口語を誤つて使つたもの」「言葉にならぬ」、11「言葉をなさない」「大さうである」、15「拙い言葉である」「大仰な言ひ方」といった批評となつて示されている。

「音楽」という言い方も、13「言葉が詰まつて非音楽的」という評語に用いられている他、03「耳に聞こえる」、15「耳には聞えない」、14「歌の調子がよくなつた筈である」などの聴覚を意識した批評が示されている。

20「余りに古臭い言葉を並べてあるだけとしか人は受け取らない」には、言葉遣いの「古臭さ」が指摘されている。

また、「散文」ではない表現を求める、12「散文通りに字余りを構はず使ふのは宜しくない」、16「字余りしなければならぬ程の必要を私は認めない」といった指摘もある。05「文法通りに解すれば」といった指摘は「よい国語」に準じるものであろう。

また、「選者の言葉」において、「言葉の不備なために十分な表現を得てゐないやうなお歌に対し、私が少し筆を加へることのある」とされていたが、「初歩の人への添削」においても、同様の例が見受けられる。

01「云ひたい筈の作者の心がよく出ない」、02「言葉は必要のない限りは省略して効果の多い句を置かねばならない」、03「確

かに読者へ通じない」、17「あやふやな言葉である」などの指摘がそれにあたるだろう。また、16「悲しからずや、などと云つてしまつては面白味はなくなる」として「悲しからずや」を除く添削をしているのも、「自分の歌の模倣」への忌避によるものと思わせ興味深い例である。

内容・主題については、「言葉」の添削と重なる部分が多く、分析が難しい面があるが、例えば、09「短く云つて却つて強く響く場合もある」、11「此処は軽く云つて置く方がいいのである」のように、省筆することで、「強く響く」効果について説明されている。一方で、13「是れだけでも解る」、02「自分が見てゐると云ふよりも、見てゐるものはこれであると云ふ方が効果的なのである」、04「自己の状態を現はすべきであると私はした」、10「今即ち現在と云ふ言葉を入れることで哀感が出せたと思つてゐる」、15「自己の希望を云つただけであると明らかにして置く方がいい」といった、明言した方がよいとする指摘もされている。

さらに、上述のような「短歌の作り方」だけでは説明し得ない以下のような「添削」も施されている。

- 03 「長い病気の初めには必ず医師の診断があつたものであらうとして私はかう直して見た」
- 04 「自己の状態を現はすべきであると私はした」
- 05 「私は雨が嵐になつたことに若葉が驚くと云ふことに少しの面白さがあると思つて筆を加へて見たのである」

06 「私は作者の心もちだけを尊重してこんな風に直して見たのである」

07 「人間と云ふ言葉を加へたらいいと思つた」

09 「私は幸福であると云はせてしまつた」

いずれも、晶子自身の私見で「私は」「思つた」ということで、「筆を加へ」た添削であつたことがわかる。

また、12「女の歌は殊に誤解され易い言葉を避けねばならないために、この身を心と改めた」という指摘も、晶子の作歌において、重要な意味を持つと考えられる。

「現代歌人協会公開講座 ザ・巨匠の添削。↳添削から探る歌人の技と短歌観」第五回『与謝野晶子』松平盟子 司会・笹公人（前掲）において、『みだれ髪』の「下京や紅屋が門をくぐりたる男かわゆし春の夜の月」や、「春みじかし何に不滅の命ぞとちからある乳を手をにさぐらせぬ」の改作をめぐる、「これは改悪」「年齢を重ねて力量をつければ歌も改良されるかと聞かれたら、そうとは限らない」（九二頁）と批判されている。

この『みだれ髪』の改作については、旧稿「與謝野晶子『みだれ髪』の成立―『みだれ髪』同時代評、與謝野晶子と夏目漱石の表現比較」（岡山大学大学院文化科学研究科紀要）第九号二〇〇〇年三月 一〜二〇頁）において、同時代に『みだれ髪』が苛烈な批判を受けた表現を意図的に改めたことを指摘したが、それはまさに、「女の歌は殊に誤解され易い言葉を避けねばなら

ないため」であったことが改めて思われるのである。

また、21「形ややととのひ初めてわが藤の若紫になびく朝かな」の添削も興味深い。「原作」の「かたちややととのひ初めし棚の藤若葉紫にほひこぼるる」にある実景としての「藤棚」の「若葉」ではなく、「わが藤」として、「若紫」を添削に用い、「若紫と云ふ言葉が色の艶やかさも既に現はしてゐるのであるから、その藤の動いてゐること、そして朝であることを私は添へて見た」としている。ここには、『源氏物語』の「若紫」からの着想が看取される。

「いみじく生おひ先見えてうつくしげなる容貌かたちなり」

若紫(源氏物語) 206ページ・新編 日本古典文学全集

JapanKnowledge. <https://japanknowledge.com>. (参照 2021-10-25)

「姫君の何なにこともあらまほしうととのひはてて、いとめでたうのみ見えたまふを(略)男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬ朝あしたあり」

葵(源氏物語) 71〜72ページ・新編 日本古典文学全集

JapanKnowledge. <https://japanknowledge.com>. (参照 2021-10-25)

「かたち」ととのひ「朝」という用語からは、明らかに「若紫」が連想され、「なびく」という藤の動きには、この場面の源氏的心情が重ねられているようにも読み得るのである。「添削」によって、「原作」の意図から飛躍・逸脱し、「晶子らしい」古典的情緒を描いてみせているといえるだろう。

おわりに―「添削」の是非

「現代歌人協会公開講座 ザ・巨匠の添削。〜添削から探る歌人の技と短歌観〜 第一回『斎藤茂吉』小池光 司会・石川美南」(『歌壇』第三二巻七号 本阿弥書店 平成三〇年七月 七二〜八三頁)において、与謝野鉄幹の「添削」が、斎藤茂吉との比較で以下のように指摘されている。

(原) いたつきに身ごもる夜の明け近く諏訪の森辺にほととぎすなく

(改) いたつきにこもり居る夜の明け近く諏訪の森辺にほととぎすなく

一読してすぐわかる欠点はどこでしょうか。「身ごもる」という動詞ですよ。赤ちゃんを胎内に身籠る、なわけです。こもり居る場合、不適切であるというのはわかりますね。「こもり居る」に直してあとは直さない。茂吉の添削は思った以上にあっさりしてますね。一箇所直すと、ここもここもと次々に出てくるんですよ。そういうところを触らないで、「箇所だけ直して、人を傷つけない。私が聞いたなかで一番すごい添削は与謝野鉄幹ですよ。高村光太郎が、毎月鉄幹に送ると、全く別の歌になって自分の歌とは思えないという(笑)。一

番すごい添削は、「青」という字だけ残して全部違う。いくらなんでもこれはひどいと、高村光太郎は「明星」をやめる。そういう添削の在り方もあるが、茂吉はワンポイント指摘して終わり。その典型ですよ。(七三頁)

「一箇所だけ直して、人を傷つけない」添削が是とされているかのような印象を与えるが、「添削」は「人を傷つけ」るものであるか。高村光太郎のことも事実と異なる言及がされているが、次稿で論じる。

本稿は、二〇一九年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究C）研究課題名「多分野における創作教育の指導法の比較と改善に向けた基礎的研究」（課題番号19K00236、二〇一九～二〇二二年度）による研究成果である。同課題において稿者は「文芸（短歌創作）分野での実践研究」を分担している。

